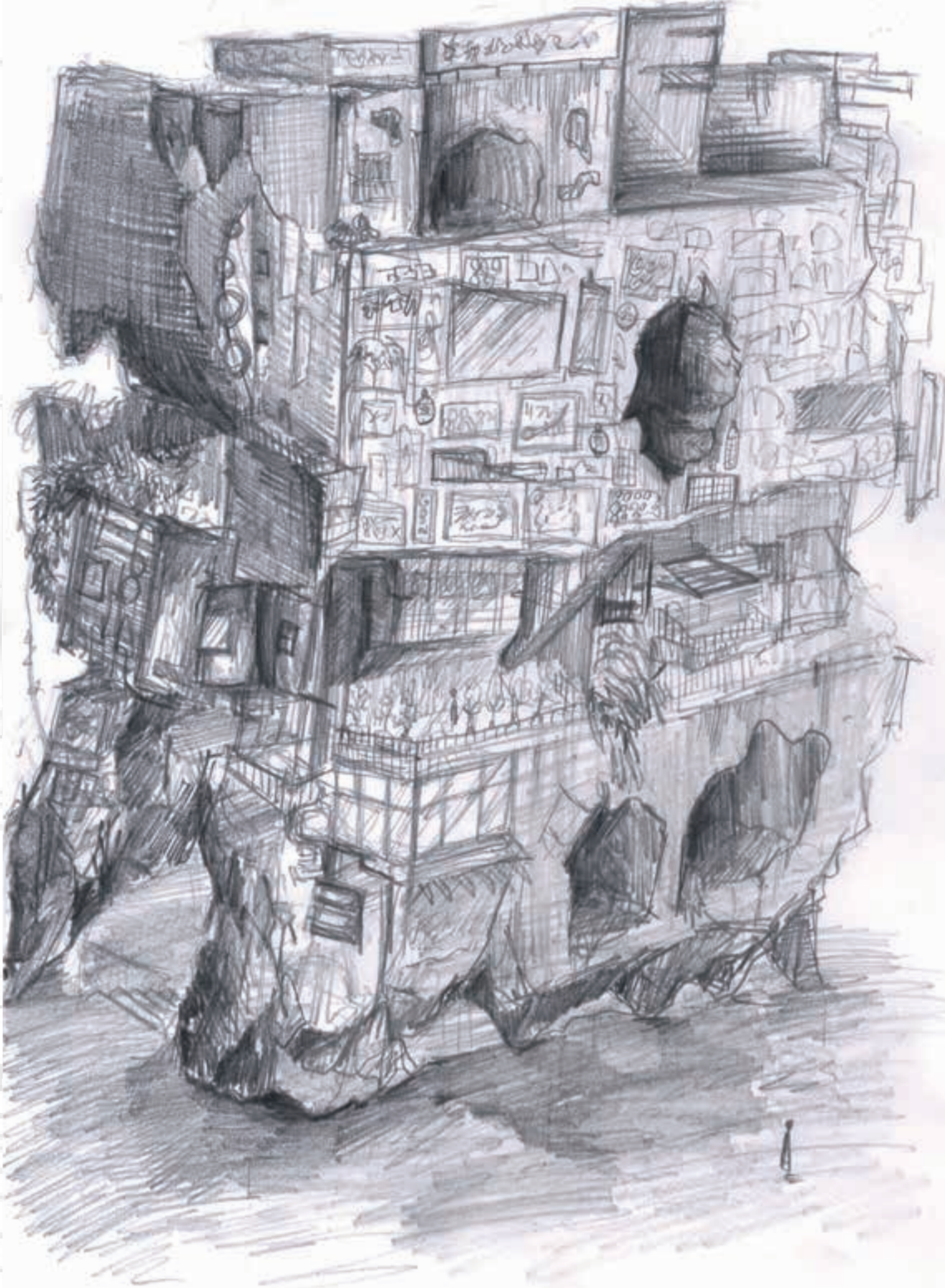


おのがじしの園

- アンビエントの高層化 -



私たちが目指すランドマークとは、その街に建ち続け過去を未来へ継承し続ける建築である。それは、その町とそこに住む人々の軌跡になり歴史が積み重なった目印になる。そんなランドマークを提案したい。

私たちが後世に残してゆきたい空間とは、イメージされる茶室や寺院ではなく京都の持っているアンビエントな部分である。路地やビルの裏側、建築の隙間のような日常に溶け込んだ風景を拾い拡張する。

01 設計へのアプローチ

01-1 古都を見直す

ロバート・ベンチューリの「建築の多様性と対立性」に対する解答を和の建築と伝統の視点から再考する。敷地はニデック京都タワービルの跡地。

01-2 建築の多様性と対立性

建築における対立性を考える際の最も重要な現象が外部と内部である。ここでは外部：公的で一般的 内部：私的で特殊 な空間とし、それらの空間や用途上の要求が衝突するところに建築が生じ意味を付加していると考え。その時、**物理的事実とその心理的な反応のずれから生じる曖昧さが対立性**だと捉える。



02 都市における自然

02-1 朽ち

一般的に自然と言われ想像される姿は緑の生い茂った草花や木々であろうが、鉄とコンクリートからなる都市においても果たしてそれは当てはまるのだろうか。(緑の自然とはアマゾンのような秘境にあるモノで都市においては当てはまらないと考える。) 都市における自然とは錆やひび割れ、劣化といった経年からなる現象だと考える。

02-2 古美 (ふるび) てゆくモノ

寺社仏閣などの古建築が、オリジナルの彩色に補修されると違和感を覚えることがある。朽ちた姿こそ愛でられる。**歴史年代的な歳月を経て建築は古美る。**

そして、多様性とは外観を見た際に感じる目新しさやジャンルといった目に見えてわかる多様さではなく、建築の「内」に存在する多様さを指していると考え。

「多様性と対立性を備えた建築には曖昧さと緊張が付きものである」とロバート・ベンチューリは記しており、私たちは条坊制と庭園の関係にそれをみた。この建築では基盤の目と庭という二つの要素から新しい空間を提案する。



断面ダイアグラム

テナント 運営 ギャラリー ゲストハウス